阿呆になる　松山成三師（遺稿）

阿呆は興奮したり、悲観、はんもんしたり、くやんだり、過去を思出したりせぬ。何時も何んでもない事にも笑つたり、悪口されても平気であり、遠い先の事を思ひ、悩む事もわづらう事も無い。

我は終戦と共に何故斯様な事になつたと、悩み患ひ或は先々を憂慮、はんもんもしない。此時こそと、本気に一心に信心に飛上り、教師の本分一途にと、心は立上り、信心する時は此時なり、神の御用をする時は、此所ぢやと、其日々々を、後先忘れて、信心、御用にのみ立上り、其気持こそ今月今日なりと、嬉しく楽しく難有く思ひ続けて、人々が心配苦悩してゐる事も、我には一向其様な気になれず、悪い妙な気は起らず、其事其時も、良い事のみ思出ては、喜びニコニコして暮されてあり、人々と比べて阿呆になつた。良い阿呆になれたと、感謝している。

「我心で我身を救ひ助けよ」とは此様な事かと、御教を一層難有く思へる。

何を食ふても同様に、おいし（う）て、何が無くても苦にならぬ。人の爲てくれる事は、皆難有い。人が他人に親切をして居るのを見ても、嬉しくて嬉しくてたまらん。礼が云ひたくてたまらん。然し云へば、態とらしく思はれはせぬか、との気がして、云へぬけれど、咽の下まで声が出そうになる。人の爲てくれる事は、自然と難有い心が起てくる。何もかもが嬉しく感謝に満ちる。此れぞ眞に信心のお蔭、信味であり、神の國、高天原、天國に安住して居るやうな心地である。生活上、苦が苦とならず、何事も（良悪し共）嬉しく難有く受取れる此境地、此んな気持を一人でも多く施し傳へるこそ、人助けの最大なる事、最も尊い事ではないか。

まつ茶二杯と、紅茶二杯とを頂（い）たので、眠られぬから此れを書（い）たが、寝られぬ事が、少も苦にならず、ねられぬから、昨今の忙しい中でも、暇が出来て書けた、難有い難有い。寝られぬ時は、寝んでもよい。其時は何でも爲ねばならぬ事、考へねばならぬ事を、爲て、眠むくなつたらねたらよい。何もねられん事を苦にする事はない。神様が用事させて下さるのだ。

笑へ笑へ笑つて暮せ、鬼はにげ出す福は来る、笑ふ事にはお金は要らぬ、此が世界の大富豪。

故　権大教正松山成三大人逝つて早くも六ヶ月、岡山中部教会では師の遺物を整理されておる内にこの程一冊のメモを発見されたが、そのなかに大連から引揚げ後の師の信境を伺うべき貴重な一文が記されていた。拝読すれば師の面目躍如たる珠玉の一篇で、特に乞うて遺族の方の許しを得、教報に掲げさせて頂く。報徳祭を迎え、新霊神として合祀される大人を偲びつつ、その床しく高い信境にふれさせて頂けることを意義深く想う。文章は原文のままにして、一二送り仮名を補足した。題名は冒頭の一句をかりてこちらで勝手につけさせて頂いたことをお断り申上げる。

（昭和二十六年十二月一日

金光教報　第一四三一號）